

昭和32年11月1日発行(毎月1回)日発行(毎月1回)第179号  
昭和32年8月7日国務省印刷局特別請求承認第132号

# 太陽

179





# 「氷壁」の作者 井上靖の魅力



峻峰極高を飛脚から登る滝谷のコースは、藤木九三氏がきわめて以来十余年、一年一バーテイ行くか行かぬ定評のある険路だが、近頃その難コースにいとむ勇路なバーテイがふえたりし

## 八十一才のファンレター

い。事情通にいわせると、これは明らかに、井上靖が朝日新聞に書いた長篇小説「氷壁」の影響だぞ。鳥もかよわぬようなその悪格で、主人公の魚津がヒロイックな遭難をするのだ。今年は谷川岳

をはじめ、山での事故が多く、世論はよくやく無謀な登山者にきびしい批判を加えた。が、山の魅力もさきながら、この話をきいて筆者は、小説マス・コミの強力を今更の如く感した。出来ばえもすぐれていたが、氷壁のように山ともともに取組んだ小説は、いまだ日本になかった。哲学者で登山家としても知ら

れている串田孫一氏は、山の仲間とこの小説のことを話して合っていたら、いつの間にかほんとうの事件について語っていることになってしまい、ザイルの切断の件では、真顔になってどールを賭けて論争？ したぞうだ。この小説は、山に羨望のない人までも愛読させたい。ナイロンザイルや



## 氷壁

年の山、氷壁、生井上靖、昭和二十二年、八月、谷川岳、主人公の魚津が、近頃その難コースにいとむ勇路なバーテイがふえたりし

登山用語も知らぬ、新聞記事もさういふ反映で、今夏は、AフェイスでどうかB沢でこうしたというふうに、表現がくわしくなっている。新聞小説に投書はつきものだろうが、魚津がふたび滝谷登頂を決意するあたりから、新聞社と作者への投書は激増した。主人公の遭難を予感するのか、八十一歳の老女の「戦後の乱れた世の中に、こんな正直な青年はめずらしい。死なせるのは、いかにも惜しいから、無事下山できるよう取りはからってほしい」というありがたいのや、母子二人ぐらしの女子高校生から、「お前も将来魚津のような青年と結婚してほしい、と日々母がいうので、ここで死なれど母がっかりする」といったじらしいのまで来たぞうだ。

「氷壁」は、井上がこれまで書いた新聞小説の第八作で、朝日小説としては三番目にあたる。昭和三十年の元旦に実際に遭難で起ったナイロンザイル事件に取材して、連載前に「今度は社会小説を書きたい」と述べ、「満ちたる潮」あたりでようやくと感させたマンネリスを破ろうとした、いわば野心作である。ザイルのテストのくだりでは、少し長いように感じられて、クワットたちも危ぶんだが、たくみな転換をみせ、終始清潔な高

調子で全篇をつらぬき、社会的反響と読者の支持からいって、近來にない成功をおさめた。通常他紙の連載小説はとりあげないのだが、八月二十七日の読売に匿名氏が「獅子文六、石川達三、石坂洋次郎の三人を、新聞小説のチャンピオンとする」とは定説になっているが、この程「氷壁」を完結した井上靖は、この三人とならんでチャンピオンの座を確保したと云えよう。「氷壁」は、井上の全作品を含めて、トップ・グループに属するものである。と前置きして、「八妻と未婚の青年の愛情」というものは、井上が今まで好んで扱ってきた材料で、「氷壁」でも、またかとかなりウサンザリさせられた。だが、山

## 戦後文壇の金田

毎朝の新聞を開いて、彼の小説の進展に一喜一憂する何百万かの読者の大半は無関心だろうが、井上が文壇に登場したのは、昭和二十四年下半期の芥川賞によるのである。授賞の対象となつた作品は、戦後間もない二十二年、大阪の近郊で單身自炊しながら、十一年ぶりでペンをとって、新聞社勤務の余暇に書きあげた「開年」である。読者の席上では、既に井上に授賞することは決定していたが、

丹羽文雄、井上靖、氏らは、むしろ「猟銃」を強くおし意見が分れたというところだ。いわ井上は、文壇への登場さとして、その後の活躍を示唆する二つの傾向の作品を手みやげとして、同時に先輩たちの前に提出したわけだ。従来井上靖論が書かれる時、大ていの批評家は主として引用するのは、「二作品」である。

井上はいわゆるセンセショナルな作家ではない。週刊誌のらん発によってマ

## 現代の寵児、ペンの人、井上靖の魅力と人間性をさぐる





四高時代



大学卒業当時



新聞記者の頃

ス・ゴマは、いっせう性急の度を加えつつあるが、文芸界に聞しても、やたらブームをでっちあげる。近頃では石原慎太郎、原田康子氏が、その被害者？であつたし、小田原海岸の堀立小屋で日だまりをたのしんでいた川崎長太郎老まて、ブームの主人公に祭りあげられた。井上の登場は、四十過ぎてという条件も加わつてか、格別サツワつたものではなかつた。闘牛も、一獲銭も、一路平安に世に送りだされたのではなく、当時鎌倉文庫から発刊されていた「人間」の小説募集に応じて、ついに入選できず、真面目を世に問う日の再来をまつて、徹底してしまつてあつたものだ。

井上は、佐藤春夫、大仏次郎、今日出海の諸氏を、今もって深く徳としているのは、氏がこれらの作品の真面目をみとめて、仲介の勞をつた思慮を感じているからである。

その言葉にこたえて、めずらしくも、當時は言葉にこたえて、「炭坑節」を歌つたという。井上の受賞後のなほなほしい活動ぶりは、多くの人が知つていようが、その人たちでさえ想像もつかないのは、その作品の量である。いま早急にめぼしい作品を数えただけでも、受賞の年二十五年十五篇、二十六年三十三篇、二十七年二十七篇、二十八年三十四篇、二十九年二十三篇、三十年二十七篇、三十一年十九篇となつており、その中には八つの新聞小説と十九の長篇小説が含まれている。その他に書かれた戯曲、詩、紀行、感想等を加へ、本年に入つて続けられつた執筆量を考え合わせると、おびただしい仕事量がなされたわけだ。芥川賞作家は戦前戦後を合わせて三十八人いるが、これだけ精力的な業績をあげ、なおも衰えぬ活動を続けている作家は、石川達三、火野葦平、中山義秀氏くらいのものである。ひとと、井上は明けがた方近くなる」と机に中腰になつて書いている、とか、さすがの彼も、これなら四高時代の柔道の猛練習の方が、すつとラクたつた

とコボした、といつたあいなゴッブが流れたが、ホントと思えてくるのも無理はない。

### 柔道と詩の青春

井上は、明治四十年、軍医の長男として、父の任地の旭川で生れてから成人するまで、両親と一緒に、十年と暮してゐない。軍人を家長とする当時の家庭にたいするわれわれの想像とちがつて、彼は両親から何らの干渉も受けずに成長した。後年このことを、彼は「両親はむしろ、ひとり離れて暮している思ひに気がなしてたようだ」と述懐してゐる。彼は、幼年期を祖母と共に伊豆の湯ヶ島で送り、やがて沼津中学校へ入つた。井上の青春の一半をしめるものは柔道への精進である。沼津時代すでに頭角をあらわしたその才能は、金沢の第四高等

それそれ好評をもつて迎えられて、その多彩な才能とうまき努力は、より高く評価されて然るべきだろう。新人の輩出した戦後だが、各界をみわたしても、これだけあざやかなしかも安定感のある活動を続けている人物は、プロ野球の金田投手以外は実証に於いて知らない。

学校に進むにおよんで、当時高専大会の優勝校であつた岡山の六高を破ることを目標に、はげしい鍛錬を受けた。彼が、左より掛ける得意の本背負の投技も、四高では封じられて、ひたすら勝つための寝投を教へられた。彼の左耳がつぶされてゐるのは、その頃の名勝負である。四高三年の後半に至つて、ようやく柔道は彼を捉えなくなった。激しい鍛錬にもまれながらも中学時代から抱えてきた詩にたいする親近感が、はじめに呼吸した自由な高校生生活の空気の中に成長した。



右から二人目が陸軍二等兵の井上靖氏

正次氏の主宰する「日本海詩人」に投稿したり、当時の花形詩人福田正次氏の詩誌「焰」へ詩を送つたりした。次にかかける「春を呼ぶな」は、彼が高専三年の正月休みに、父の当時の任地弘前へ帰つたときの作品である。

春を呼ぶな、一沫も春を呼ぶな。  
ただ、しらしらと降りてあればよい。  
そのままではいい。  
たださむさむと揺つてゐればよい。  
陸奥は吹雪だ。  
津軽は吹雪だ。  
二つの半島に抱かれた海峡！  
堪えて、堪えて、すつと堪えて吹雪の中に暮れるがいい。

海峡の底深く、真赤な花が聞くであらう。  
寒湖よりも冷く、

寒湖よりも厳然と、  
意志が、真冬の海峡の意志が、  
今宵、静かに、ひとり開くであらう。  
柔道は、若い井上の時間の多くを費やしたが、不思議にその作品にとり入れられてゐない。柔道四段の彼は、スポーツは読みものとしてでなければ、文学の主題になり得ない、とたく信じているようだ。だから、「水壁」でも、井上は登山はスポーツではないと考えているわけだ。

柔道への距離がますますつれて、彼の詩作への専念は深まつたが、それにとま

### 晩成への自重

う交友の変化は、彼にデカダンスの味わいを教えた。昭和五年四高の理科を終えながら、井上は、両親のひそかな期待を裏切つて、大学の医科へ進まず、九州大学の文学科へ入つたが、登校の興味を失つて上京した。その頃、有名無名の詩人たちの梁山泊の観があつた福田氏の家へ出入りしたり、ダグアイストとして有名なた辻潤氏を知つたりした。やがて東京を離れて、京大の美学へ入学しなおしたが、十一年に卒業するまで、ここで勤勉な学生ではなかつた。

十年と続けて、サンデー毎日の懸賞小説に応募当選している「流転」は、同じくサンデー毎日の懸賞小説で、彼は大衆文学振興の功労者の名をかぶせられた千葉龜雄賞を受けた。これは時代物である

## 内科的に治す

### 新胃潰瘍薬

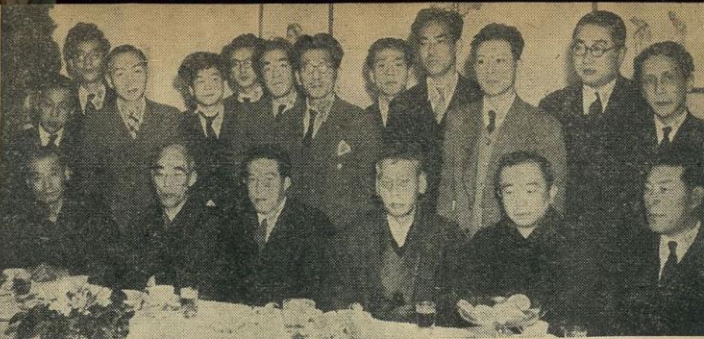
# メサフィン

創面にピタリと附着して胃壁のさすそのものを治癒せしめるばかりでなく、胃酸やペプシンの刺激に対する抵抗力をたかめるので、ニッセン(胆汁)の消失が早く、而も再発率の少ないことが本療法の特長です。

劇痛にも即効し、苦味のない新胃潰瘍薬です。

説明書送呈 100錠 700円 50錠 380円  
エーサイ株式会社  
東京都中央区行町1-10-10 MIM





昭和25年芥川賞授賞式における記念写真。左より池井孝作、宇野浩二、井上 靖、佐藤春夫、舟橋聖一、石川達三の諸氏

が前記の二作は現代物とスリラー物だ。井上がなぜ感情時間の中に、懸賞小説を書いたのかは、わからないが、興味がある。自分の才能をためてみたかなんか依然親がかりであったらしい。学生生活の終り近く結婚したことによっ

### 計画と行動の作家

井上は十五年にわたる新聞記者生活に終止符を打ち、昭和二十六年の五月からかねての念願とおり専ら作家生活に入ったが、決心を実行に移すまでに三年を費している。固い決意を秘めながら、同僚や後輩にさえ、彼は軽身について謙虚に意見を求めた。扶養すべき家族や係累を抱えていた当時の井上としては当然の熟慮であったろうが、すべて一旦実行に移せばツラにやりとげる彼が、実に緻密な計画者であることがうかがわれる。「どこちち最後はどこかで賭けなければならぬ」とは彼の人生観の根底を流れる考えであり、井上の作品を解く重要な鍵であるが、彼は行き当たりばったりの賭博者ではなく、細密な計算による確率を見定めて勝負にでる性格の持主だ。井上の小説は、構成の巧み、筋の展開の流暢さにかくれて、実地調査や準備の

### もうひとりの彼

井上は紳士だ、と彼と接触するたいはいの人たちがいう。この採点は、奔放な反俗派や破滅型の作家が割拠する文壇外でも通用することはない。両親への仕え方や、交友の態度や、家庭人としての日常などの、どれか一つをとりあげても、その評判は裏切られまい。

勤務ぶりだったが、彼が停年まで勤めたのか。いずれにせよ、以来十一年をへて井上が「開牛」を書いた動機とは全くちがうことだけは断言できよう。これらの小説は、むしろ読物というべく、詩は別として、当時の彼の「文学としての小説」に対する抱負の片鱗もうかがうことができない。千葉賞は千五百円であった。大学出の初任給が、六七十円が相場頃だ。それくらいあれば一年はゆうゆう食べるのだが、井上は、おまけにそれがチャンスとなつて、就職のシーズン・オフである八月に「サンデー毎日」に入社し、やがて同じ大阪毎日新聞の学芸部に転じた。彼は昭和十二年日支事変に輻重兵として応召したが、北支方面で病気になる。内地後送後除隊となつたのは翌年の四月である。その頃街のベスト・セラーは戦記物だった。井上の語る戦場の話をきいて、学芸部のベテラン記者辻平一氏が、今兵隊物を書けば必ず当るよ、とせきこんだ調子ですすめた時、井上は「三十年は何も書かないで勉強するつもりだ」と相手を押しなだめようとして答えた。戦場の体験が、彼を教えたのかも知れないが、賢明な井上は、つとに内に閉こらうとしたあだ花をのみとって、自分の早熟に傾こうとする才能の晩成をはかったのだ。

新聞記者としての井上は、ミスのない丹念さが見のがされがちだが、その努力は並たないのでもない。「氷壁」について、彼は山のことでは間違いないが、山のことでは間違いないが、山のことではないと言明したが、専門家は肯定している。実際に井上は、四回樺島に登ったし、登山団体のリーダーや、ザイルのテストをおこなった大学の教授たちと三十数回懇談をしたという。彼はほんとうが知らないことを知っているのか、いつぞやの長所に長い間の職業であった新聞記者の訓練が加えられているのか。いつぞや井上は、愛媛から「ペン」を置いて七分後に北海道北端や、九州の南端を、その目で見てくるために、気懸にスーツ・ケースと共に机を離れるのだ。井上の情景描写の迫力は、忠俗な意味でなく「足で書いて」確かさがもたらしたものだ。

だが筆者に興味があるのは「もうひとりの彼」なのだ。井上は「私をあかさまに語りはしない、のぞかせない、彼には所謂私小説がないが「四十過ぎて書く小説だから」といったわけ物語の理由からであるまい。あすなろ物語にしても「駒槍」にしても、シチュエーション勤務ぶりだったが、彼が停年まで勤めたとして、大特ダネをスクープしたり、コラムの執筆者として名声を博したりは、期待できないだろう。かつての新聞人の先輩と同僚は、異口同音に「当然いつかは作家になる人物だった」といっている。「あすなろ物語」の「勝敗」という章で、彼は、戦時中競争紙の敏腕記者左山と比擬山で、敵国降伏の大機密行事を報道くべすエピソードを書いている。これは井上と実際に体験したことだ。左山は井上と同僚の才物として知られていた同僚がモデルだ。行事に遅刻してきた左山が、ろくに式場もみないで、何時間も前から取材に当たっている主人公の粘太を尻目にしつながら、電話器に立つと、活弁もどきに自信にみちた口述を終えるのを聞きながら、ああ新聞記者として、おれはかなわない、と思つたのは粘太ならぬ井上自身であったろう。だが、いかなれば可もなく不可もない此の雌伏の記者生活の長年月が、今日の彼に取材視野の広さ、筆力とその速度をきたえて、天賦の才能である小説構成の巧みさ、ブラスしていることはいまめまい。

歴史的な八月十五日、不安と虚脱から社会部員が、責任をのがれて一人二人と席をはずして立ち去った室内に居残つて、井上は「終戦の詔勅を押し奉りて」私小説のスタイルをとつたりしているが、彼は大阪時代途方もなく競馬にこつて、借金返済のために、気のすまなかつた「流転」の新版を名もなし神戸の本屋から出したことがある。それほど投資？して少しももうけられなかった。すつてはばかいか、もはや面白いか、と同僚がきいたら、有金残らず無くなり、最後の馬券一枚手にして、夕暮のせまる馬場で最終レースのスタートを見守る瞬間の気分はいいものだ、と答えた。「開牛」のさき子が愛人の津上をやや腹立たしげに評する「やくざな面」それはモデルといわれたなびが氏でなくて、まぎれもなく作者の井上自身にある。「分身」の横顔ではないか。現実にもみる端正な社会人としての彼の「もうひとりの彼」は、井上の小説のいたる所に分身として浮彫にされている。小松神六氏が「彼の一方の眼からは寛容、友愛がのぞき、他方の眼からはそれと反対の非情、傍観、孤独がのぞかれるのではないか。しかもこの二つの眼、矛盾した眼は、相殺されながら一つの眼差しはなつてあらわれな」と多くの読者は魅力を感じるのだから、井上靖は五十歳だ。マス・コミのトップグループに列した此の作家のひそかに願いは「少しずつ気むすかしくなっていきたい」とのことだといふ。「氷壁」でも、

表紙のことは  
十和田湖  
山下 清

秋田へ行って秋田犬とよらんをなめてもらい、それをスケッチしてみたが、二つとも動くものでなくかたくなかった。はくは子猫のときから花や景色はかたくなだった。動物や人は手がた。犬とよらんは絵は苦しいが、手はかたくな。それからあつて行った十和田湖は、大変かきよかつた。はじめてのときだが、はくは好きな景色で感動もどんでんできた。舟の上から食べた甲斐に、たのかけりをしてこまかつた。それでもその景色ははくは日本一だといつてもさうう。はくは日本一をみみたが、十和田湖の方むむは美しいと思うのでこんどの訪問もたいへんたいへん。



藤田と井上靖の対談

(T・K・D)